

た。

## 2. デリヘルプロジェクト

新宿2丁目における重要な構成要因であるバーおよびクラブの顧客や従業員を対象として、AIDS/STI やセーフターセックスを身近に意識してもらうことを目的に、コンドームアウトリーチをおこなっている。これはもともと自主的にコンドームの無料配布していた新宿2丁目の商業施設のオーナー達による団体「project com.」との協働事業であり、Rainbow Ring がアウトリーチスタッフの提供およびコンドームの作製・提供をしている。

ボランティアであるアウトリーチスタッフ「デリヘルボーイ」(delivery health boys の略)を募集し、毎週金曜日に新宿2丁目において、コンドームなど啓発資材のアウトリーチをおこなっている。

今年度作製したコンドームパッケージは12種類であった。また、今年度は40回(うちイベントにおける配布を3回)のアウトリーチで、1回あたり899~2,441個、のべ42,590個のコンドームを配布した(イベントを除く)。配布したボランティアは各回6~11人であった(イベントを除く)。配布店舗数は1回あたり135~143軒であり徐々に増加傾向にあった。

デリヘルボイの活動が定常的におこなわれることにより、徐々に認知も向上し、店舗との交渉がスムーズになり、デリヘルボーイによる各店舗からの意見や情報の収集も得られるようになった。また、コンドーム以外の啓発資材の配布も可能となった。

デリヘルボーイは、毎月数名ずつ新人が入ってきており、また同時に活動に参加しなくなる人もいるため、比較的出入りが激しい。デリヘルボーイとして参加することが、そのスタッフにとっての予防啓発のきっかけになることも予想された。彼らはアウトリーチをしている際に、HIV/STI や予防についての質問をされることもある。彼らの中でそれを共有するような工夫をしているが、デリヘルボーイへの講習会やワークショップも必要であり、それが若者への予防啓発の一端になる

と考えられた(後述)。

## 3. スタッフ向け講習会

上記の理由により、基本的には若いスタッフを対象とした(誰でも自由に参加できる)講習会を8月から毎月開催した。内容や手法は毎回講師によって変わり、医学的なことから予防啓発活動の手法について考えるものまで、講義形式からワークショップをおこなうものまで、多岐に及んだ。

勉強会・ワークショップは、今までの経験によると、参加者ごとにニーズや元々持っている知識レベルが違うことや、参加者を集める(毎回同じ参加者でマンネリ化する・新規の参加者が集まりにくくなる)ことなどに関して、継続して行うことに困難を感じていた。この形式によれば、ある程度同じレベルでターゲットがしぼられ、しかも若いスタッフを育成することもできるため、効果的な講習会になると考えている。

## 4. ハッテン場プロジェクト

今年度も引き続き、ハッテン場顧客へ直接アプローチするための資材を作製して配布し、また、ハッテン場顧客と経営者の両者が参加できるカフェイベントを開催した。

### 1) Fucks! café

ハッテン場やハッテンに関するテーマをもとに参加者どうしで話し合うカフェイベント。4月~10月の第二土曜日にaktaで開催した。フライヤーを作製し、ハッテン場の関係者から利用者まで幅広く参加をよびかけた。10月には「ゲイビジネスとセーフターセックス」というテーマで、テーブルトークショーを開催した。

### 2) 季刊紙「Fucks!」

ハッテン場の顧客を対象とした、ハッテンスタイルに関する情報誌。ハッテン場でのセクシャルヘルスの向上を目的に、Fucks! café で得られた情報や、把握できたニーズに応える形で構成している。第二号3,000部作製し、11月中に98店のハッテン場に10部ずつと、デリヘルで各店舗(約160店舗)に10部ずつ配布した。

### 3) バレンタインキャンペーン

後記の「EASY!キャンペーン」に引き続くかた

表2 スタッフ向け講習会

	日時	テーマ	講師	参加人数
第1回	7月22日	HIV感染症の基礎知識	佐藤	13人
第2回	8月26日	東京都のエイズの現状と対策	飯田	15人
第3回	10月28日	自分の心と向き合う	今井	12人
第4回	11月25日	若い僕らとビョーキ	市川	10人
第5回	1月27日	Living Together を考える	張	13人
第6回	2月24日	Remember「新木場ゲイ殺人事件2000」	永易	18人

ちで、ハッテン場を対象としたキャンペーンを展開した。独立したキャンペーンではなく引き続いたかたちにした理由は、1) 「EASY!〜Living Together is Easy」のコンセプトを取り入れたキャンペーンにすること、2) ハッテン場だけを対象にキャンペーンを行うのではなく、ゲイコミュニティ全体を対象とするキャンペーンの中にハッテン場が含まれているという見せ方をするため、の二点が上げられる。

キャンペーンは東京近郊のハッテン場 90 店舗のうち、協力依頼をして了解を得られた 66 店舗に対して、ポスターの掲示（2月14日前後）と、ポストカードブックの配布（3月14日前後）を実施した。キャンペーンの紹介をする WEB サイト（<http://www.living-together.net/2006valentine/>）を開設し、協力いただいた店舗はキャンペーンの WEB サイトで紹介をした。キャンペーンの宣伝は、ゲイ雑誌やインターネット（WEB サイト、バナー広告、コミュニティサイト、ネットニュース）、イベントのフライヤー上でおこなった。

## 5. 医療・検査・行政との連携と情報提供

医療・検査機関、行政と協働して行ったものは以下の通りである。

### 1) S/H Vol.5 の発行

S/H は MSM のセクシュアルヘルスの向上を目的に、医療や検査などに関する情報を提供するフライヤーである。第5号は例年おこなっているアンケート調査の中の、HIV/STI の知識を問う質問の解答を掲載した。

### 2) ドクターへのインタビュー

拠点病院で HIV の診療に携わっているドクターにインタビューをおこない、マンスリーakta に掲載している。診療の中でゲイと接触することをどのように感じているか、などをインタビューし、拠点病院での診療がゲイにとって敷居の高いものではないことを示し、診療を受ける上での参考にしていただくことを目的とした。また、ドクターに対しては、Rainbow Ring の活動を示し、コネクションを形成する。

### 3) Living Together Lounge (後述)

Living Together 計画の一環として昨年度から行っているイベントである。東京都の委託事業として開催した。

### 4) 東京都保健所マップの作製

東京の HIV/STI 検査機関を紹介するパンフレットである。Rainbow Ring の活動を通じて連携のできたデザイナー・イラストレーターと協働で作製した。

### 5) 南新宿検査相談室のポスター・チラシの作製

「検査に行ってもよかった」「私たちがお待ちしております」のキャッチコピーをもとに、Rainbow Ring と連携のできたデザイナー・イラストレータ

ーと協働で作製した。

### 6) 新宿区保健所のゲイのための検査イベントの広報

新宿区保健所主催の検査イベント告知のチラシを、デリヘルプロジェクトを介して配布した。受検者のうち、チラシを見て来場した人が 2 割いた。

### 7) 横浜市西区保健所主催「Living Together」展

「Living Together」計画にご協力をいただいている写真家が撮り下ろした写真とテキストを展示した。Rainbow Ring はポスターとチラシをデザインした。

## 6. Living Together 計画

感染者との共生をテーマに、NPO 法人「ぶれいす東京」がはじめたプロジェクトである。共生は予防においても重要なテーマであり、昨年度から Rainbow Ring も協働で進めさせていただくことになった。予防とは感染者を排除することではなく、感染者と共生するコミュニティに生きるからこそ予防が必要だという視点を持つためには、できるだけ感染者が身近に感じられる工夫が必要である。

1) Living Together Lounge (音楽とリーディングのタベ) : クラブイベント会場・ミュージシャン・ゲイ著名人とのコラボレーションで実現 (毎月 1 回開催)。感染者やその周囲の人が綴った文章をゲイ著名人が朗読し、その合間でライブミュージックおよび DJ の選曲・アレンジした音楽を楽しむイベントである。毎回 40~60 人の参加がある。

### 2) EASY! キャンペーン

例年 Rainbow Ring は、12月1日の世界エイズデー前後にセーファーセックスキャンペーンを展開し、ゲイおよびゲイミックスのイベントにてキャンペーングッズを配布してきた。これは主にクラブイベントで遊ぶことが好きな層をターゲットに、コンドームと一緒に予防啓発メッセージを届けることを目的にしてきた。今年のキャンペーンは「Living Together 計画」の一環として行い、世界エイズデーの後 1ヶ月間 (12月2日-12月30日) に、都内で開催されたゲイおよびゲイミックスイベントにおいて、キャンペーングッズ (写真集・コンドームとポストカードとセーファーセックスガイドのセットの二種類) を配布した。

キャンペーンのコンセプトは「EASY!〜Living Together is Easy」とした。これは陽性者との共生が決して困難ではない (EASY) ことや、誰にとっても生きていくことや健康であることは大切で、それをあえて「EASY!」と言うことで一緒に克服していこう、という想いを集約したものである。今年のキャンペーンの特徴としては、

- ・伝えたいコンセプトをはっきりさせた。

・大版の写真集を作製した。内容は、日常生活やセックスや恋愛における 20 のテーマについて、HIV 感染という体験から考えたことを様々な人（陽性者・非陽性者にかかわらず）に綴ってもらった文章を掲載した。文章の募集や選択、編集は「ぶれいす東京」と協働しておこなった。写真は akta で写真展をしていただいた写真家に依頼して撮影し、いままで築いたネットワークを活用して、モデルやデザイン、翻訳を依頼して作製した。

・セーファーセックスガイドは、HIV に感染するリスクを低減する方法を、感染のメカニズムから考える内容のものを作製した。これは陽性者・非陽性者に関わらず利用できるように配慮した。また、ゲイを対象とした HIV/STI の電話相談をおこなっている機関に依頼し、電話相談の紹介を掲載した。

・キャンペーンの告知は事前に、ゲイ雑誌やインターネット（WEB、バナー広告、コミュニティサイト、ネットニュース）などのメディアや、イベントのフライヤー上でおこなった。

・コンドームとポストカードとセーファーセックスガイドのセットは折り込みにしたが、写真集は各イベントにスタッフ（EASY! BOYS）を派遣し、全て手配りで配布した。

・キャンペーン後に、キャンペーングッズや EASY! BOYS の着用していたデザインの T シャツは、WEB 上でも手にはいるよう募集し、キャンペーンの反響を見た。

などが挙げられる。

38 のイベントで、5105 個のコンドームセットと 2785 冊の写真集を配布した。また、デリヘルプロジェクトを介して新宿 2 丁目の 146 の商業施設にも配布し、90 のハッテン場にも 10 部ずつ配送した。

## 7. ホームページ

Rainbow Ring のホームページ以外に、Living Together 計画、EASY! キャンペーンはそれぞれ独自のホームページを持っている。

<http://www.rainbowring.org/>

<http://www.living-together.net/>

<http://www.living-together.net/2005easy/>

ホームページは予防啓発の情報提供に加え、我々の活動をコミュニティに紹介し、還元していくことを目的にしている。キャンペーンの告知や終了後の御礼、または入手した予防啓発の情報をアップしている。

## D. 考察

過去 3 年間の活動を通して、ゲイコミュニティの中で我々がリーチできる層は主に、1) 新宿 2 丁目を主としたバーを利用する層、2) ハッテン場を利用する層、3) クラブイベントが好きな層、

に分けられると考えている。そしてそれぞれの層におけるキーパーソンに対して継続してアプローチをおこない、関係作りをしてきた。今年度はそれらに対するアプローチをより強固に、より効果のあるものにするために、akta を拠点としたネットワークを活用して活動を展開した。

コミュニティセンター「akta」は開設当初から、特に「無関心層」を呼び込むことに重点を置き、開かれたコミュニティセンターとしての機能を充実させることを優先してきた。ゲイコミュニティで活躍しているアーティストによる展示会を開催し、講演会やライブ、教室や講習会など、さまざまな企画に活用していただいた。また、PRHYTHM ではゲイに人気のある DJ に参加していただき、多数の動員が見られた。その結果、akta の利用を通してキーパーソン（アーティストや DJ など）自身が Rainbow Ring の活動に理解・興味を示し、囃らずしも活動に参加・協力していただく機会を提供することになった。そこで今年度は「囃らずも」以上に、あえて積極的に Rainbow Ring の予防啓発活動にコミットしていただけるように働きかけた。今年度作製した資材のほとんどは、このような連携をもとに製作され、流通している。

今年度のキャンペーンは、昨年度からおこなっている Living Together 計画の一環としておこなわれた。コンセプトや伝えたい内容は、Rainbow Ring のスタッフとぶれいす東京のスタッフで練り上げ、それを各資材の作製を担当していただくカメラマン、デザイナー、編集者に伝えた。各担当者はそのコンセプトを吟味し、妥協を許すことなく資材を作製していただいた。

ゲイコミュニティの中には、HIV の予防啓発にコミットしたい・貢献したいという意識が少なからず存在すると思われる。akta を通じてそのような意識が掘りおこされ、機能的に結びついていると考えられる。その典型的な例が今年度のキャンペーンに表れている。コミュニティの中から出てくる意識を掘りおこし、行政や医療や NPO などとも連携してプロジェクトをオーガナイズしていく、このようなネットワークを利用したプロジェクトの担い手こそが今後の Rainbow Ring の役割であると言えよう。

デリヘルプロジェクトは、若年層のボランティアスタッフ（10 歳代～20 歳代前半）が活動の中心となっている。今年度も新規のスタッフが 10 名以上参加し、その一方で参加しなくなったスタッフもほぼ同数おり、比較的回転が速いことが特徴である。また、活動の経験の浅いスタッフが、予防に対する知識や認識が低いのは当然のことである。デリヘル活動の中で、それぞれのスタッフが抱えた問題は、スタッフ間で共有して解決する工夫をしている。若いスタッフ向けの講習会は、その中から出てきた声をもとに企画されたも

のである。スタッフがアウトリーチの現場に出て体験することや、他のスタッフとコミュニケーションをとる中で、予防が自らの問題であることを再確認し、自発的に学ぼうとする姿勢がみられたことは、彼ら自身にとっても非常に有意義なことであったと考えられる。そして、そのようなプロセスが、これからの活動を担っていくスタッフ育成につながると思われる。

ゲイコミュニティ、NGO との協力関係や信頼関係の構築は HIV 感染拡大防止の正否の上で重要であると考えられる。akta を拠点とした啓発ネットワークが拡大し、ゲイコミュニティにアプローチする啓発体制が構築されつつあり、訴求性のある啓発資材の開発と普及方法に一定の成果を得ていると考える。また、若年の MSM が予防啓発活動に参加することで彼ら自身が啓発され、自発的に活動に関わる人材を育成する体制も確立されつつある。MSM に訴求性の高い啓発資材を開発し、効果性の高い啓発普及手法を構築することは、HIV/AIDS が増加している現状へのエイズ対策に貢献するものと考えられる。

今後は、これから掘りおこされてくるであろう、より個別なニーズや専門性を要するニーズにも対応できるような、啓発プログラムの開発やスキルの獲得をめざす。そして、効果性の高い予防啓発モデルを構築し、提示したいと考えている。

## E. 結語

東京地域では、ゲイバーとの協力によるコンドームアウトリーチ、クラブイベントでの啓発、ハッテン場との協力による啓発、また東京都との協働による若者向けやハッテン場向けの講習会などのプログラムを行った。

当事者参加の予防啓発は、訴求性の高い啓発資材、啓発方法を具体化し、ゲイコミュニティとの連携を推進した。その基盤として予防啓発のための拠点 akta の存在が大きい。それは当事者のもとでコミュニティに開かれた場として運営されていることが背景にある。さらに啓発活動を維持しているデリヘルボーイのアウトリーチは商業施設との連携を高めている。加えてゲイ雑誌等のメディアからの支援、クラブイベントの主催者との連携、NPO 法人ふれいす東京との協働など、ネットワークの拡大が、啓発普及を一層に促進すると考えられる。

## F. 発表論文等

### 口頭発表

- 1) Ichikawa Seiichi, Satoh Mio, Utsumi Makoto, Onizuka Tetsuro, Yamamoto Masahiro, Kimura Hirokazu: Preventive enlightenment by gay CBO in Japan Seventh International Congress on AIDS in Asia and the Pacific July 3, 2005 Kobe

## 名古屋地区における同性間の HIV/STI 感染予防啓発の普及促進に関する研究

分担研究者：内海 眞（高山厚生病院・名古屋医療センター）

研究協力者：石田敏彦（Angel Life Nagoya）

### 研究要旨

我々は 2000 年 4 月に MSM（Men who have Sex with Men）の CBO（Community Based Organization）である Angel Life Nagoya（ALN）を立ち上げ、名古屋医療センター（旧国立名古屋病院）の医療者と共に協働組織を作り、MSM を対象とした HIV 感染予防啓発活動を開始した。最初の 2 年間は我々独自で活動を続けてきたが、2002 年からは市川班に所属して進めてきた。これまでの約 6 年間に、以下の活動を実施してきた。Ⅰ）ゲイコミュニティへの HIV 関連情報発信（①啓発パンフレットとポスターの製作と配布、②インターネットによる情報発信、③月 1 回の HIV/STD 勉強会の開催、④予防啓発映画の作製、⑤啓発拠点（3N）の設置と広報活動、⑥無料抗体検査会に併設した啓発イベントの開催）、Ⅱ）メッセージ付コンドームの配布、Ⅲ）無料 HIV 抗体検査会の開催、Ⅳ）調査研究（①MSM を対象にした性と HIV 感染症に関する意識調査、②ゲイバーのマスターに対する ALN の活動の評価調査）。

上記活動の結果、次のような成果が得られた。即ち、勉強会は現在まで継続されている、イベントへの参加者は増加した、コンドーム配布量も増大した、検査会への参加者も増えた、ハッテン場のオーナーの理解が得られた、ゲイバーのマスターの理解が深まった、他の組織との連携も深まりつつある、近隣の人々の理解が得られた、などである。

我々の活動の最終的な評価は、エイズ患者の減少と新規感染者の減少の 2 点でなされる。ただし、予防啓発活動が効果を現し始めると、検査を受け且つ診断される人の数が増えるために、一時的には感染者の数が増加すると予想される。実際、2005 年 1 年間の日本における新規 HIV 感染症患者報告（速報値）では、感染者は前年を上回りエイズ患者は前年より減少しており、日本全体としては予防啓発活動の効果が現れ始めていると考えられる。しかし、名古屋地区では新規感染者数は増加し、エイズ患者数も減少していない。また、新規 HIV 感染症患者の初診時の CD4 値も低いままで、感染者の増加が早期診断による増加とは考えにくい。つまり、我々のこれまでの活動は、エイズ患者の減少や早期診断による感染者の増加と言う結果に結びついてはならず、その意味では未だ真の意味での成果、効果をあげてはいないと結論付けられる。

それでは、今後どのような考えで予防啓発活動を進めるべきか。我々の考えは以下の通りである。現在の活動は継続しつつ、ゲイコミュニティに対する新たな方法による情報発信を試みる。さらに、医師会、学校の教師、養護教員、行政、保健所、他の CBO/NGO と交流し、我々の活動に対する理解と協力を要請する。最後に、我々自身もゲイコミュニティのみをターゲットとするのではなく、幅広く社会全体に対する HIV 感染症の予防啓発にも参画する。なぜなら、社会全体の理解が深まれば、必ずそれはゲイコミュニティにもプラスの形で反映するからである。

2005年度の具体的な活動としては、最初に述べたこれまでの諸活動に加え、以下の新規活動も導入した。即ち、コミュニティーペーパーの発行、インターネットによる宣伝の強化、イベント(NLGR)における啓発活動の強化、各種団体との交流と協力要請(大学、医師会、養護教員の会、行政、保健所、他のCBO/NGO)、社会全体に対する啓発活動への参加(世界エイズデーin NAGOYA、サマーセミナーなど)である。

5回目となる無料HIV抗体検査会には425名の受検者が来訪し、9名のHIV感染症の早期診断がなされた。検査会スタッフには東海4県の医療従事者や行政関係者、あるいはCBO、NGOの方々が、総勢100名以上参加して下さった。彼らが本検査会を通して学んだものを、日常の予防啓発に少しでも役立ててくれることを期待している。さらに、次回の無料抗体検査会からは、これまでボランティアスタッフとして参加して下さった名古屋市の職員や保健所職員を名古屋市が勤務として処遇してくれることが決定された。行政とのより強い連携が形作られたと歓迎している。また、本検査会を、初めてのHIV検査の機会とした人々の数は100名を超え、本検査会が彼らの受け皿としての機能を果たしたことも重要な点と思われる。今後も検査会は継続する予定である。

本検査会の究極的な目標は、名古屋地区を中心に受検者のニーズにあった検査環境が整えられ、本検査会が不要になることである。従って、検査環境の改善にも今後取り組んでいかなければならないが、本検査会に参加したスタッフが検査環境改善の協力者になっていただけることを強く期待している。

我々の活動は未だ十分な成果をあげてはいない。我々は、出来るだけ情報を交換し、よいものを取り入れ、現状に満足することなく、地域特性に配慮しながら予防啓発活動を推進していかねばならないと考えている。

## A. 研究目的

我が国の新規HIV陽性者(感染者・エイズ患者)は今なお増加傾向にある。その中でも特に男性同性間の性的接触による感染が拡大しており、近年の新規陽性者の大半はこの感染によって占められている。名古屋地区においても同様の傾向が認められ、この地区における男性同性間のHIV感染予防は重要且つ喫緊の課題となっている。

我々は2000年4月に、HIV感染予防を目的として、MSM(Men who have Sex with Men)のCBO(Community Based Organization)であるAngel Life Nagoya(ALN)を立ち上げ、名古屋医療センター(当時は国立名古屋病院)の医療者との協働組織を形成し、名古屋地区におけるHIV感染予防啓発活動を開始した。

平成17年度の本研究事業では、まずI)これまでの予防啓発活動の成果・効果について名

古屋医療センターの新規HIV陽性者(MSM)の年次推移を分析することによって評価した。次いで、II)その評価結果をもとに今後の予防活動の方針を策定し、III)その方針に沿った具体的な予防啓発諸活動を立案し、それらを今年度から実施し始めた。

本報告では上記I)II)III)の内容とともにIII)の成果の一部を記述し、これらが男性同性間のHIV感染予防に対して有する意義を考察する。

## B. 研究方法

I)これまでの予防啓発活動の成果・効果

2000年から始まったALNのメンバーと名古屋医療センター(旧国立名古屋病院)の医療者との協働組織による予防啓発活動の成果・効果を、名古屋地区のHIV陽性者の大部分が受診する名古屋医療センターの新規HIV陽性者(MSM)

の年次推移を解析することによって明らかにせんとした。予防啓発活動のポジティブな評価は最終的には新規 HIV 陽性者の減少を以てなされると考える。しかし、予防啓発活動の効果が現れ始める初期の段階では HIV 抗体検査を受ける人が増えるために、返って新規 HIV 陽性者の数が一時的に増えることが予想される。ただし、その場合は検査により早期診断が促されるので、同時に新規エイズ患者数の減少を伴うはずである。そこで、予防活動の開始直前および開始時である 1999 年と 2000 年における名古屋医療センターの新規 HIV 陽性者数 (MSM) ならびにその中の新規エイズ患者数 (MSM) の割合と、予防啓発活動が数年経過した後 (2004 年、2005 年) の新規 HIV 陽性者数 (MSM) とその中の新規エイズ患者数 (MSM) の割合とを比較検討した。また、予防啓発活動が効果的であれば早期診断、即ちより CD4 値の高い時期に診断が促されると仮定されるので、予防啓発活動開始時の名古屋医療センターの新規 HIV 陽性者 (MSM) の CD4 値を、予防啓発活動開始後数年経過した時期のそれと比較検討した。上記検討結果から、これまでの名古屋地区における予防啓発活動の効果を判定した。

## II) 今後の予防啓発活動の方針

I) の方法による判定結果を基に、今年度を含む向こう 3 年間の予防啓発活動の方針を定めた。

## III) 今後の予防啓発活動

上記方針に基づく具体的な予防啓発活動を立案し、かつ可能なところから実施してその成果を検討した。

## C. 研究結果

### I) これまでの予防啓発活動の成果・効果

2000 年に始まった名古屋地区の MSM を対象とする HIV 感染予防啓発活動の内容は、次の通りである。1) ゲイコミュニティに対する情報発信 (①啓発パンフレットとポスターの作成と

配布、②インターネットによる情報発信、③月 1 回の HIV/STD 勉強会の開催、④予防啓発映画の製作、⑤啓発拠点 (3N) の設置と広報活動、⑥無料 HIV 抗体検査会に併設した啓発イベント [NLGR:Nagoya Lesbian & Gay Revolution] の開催、2) コンドームのゲイバーとハッテン場への配布、3) 無料 HIV 抗体検査会の開催、4) 調査研究 (①MSM を対象にした性と HIV 感染症に関する意識調査、②ゲイバーのマスターに対する ALN の活動の評価調査)。

上記活動の結果、以下のような成果が得られた。即ち、勉強会は現在まで継続されている、イベントへの参加者は増加した、コンドームの配布量も増大した、無料 HIV 抗体検査会への参加者も増えた、ハッテン場のオーナーの理解が得られハッテン場にコンドームを準備してくれた、近隣の人々の理解が得られた、などである。

1999 年および 2000 年と 2004 年、2005 年の名古屋医療センターにおける MSM の新規 HIV 陽性者数は、資料 I のとおりである。1999 年と 2000 年は新規 HIV 陽性者の数が少ないため合わせて集計し、これを予防啓発活動開始時のベースラインデータとした。活動開始時に名古屋医療センターを受診した新規 HIV 陽性者数は 52 名で、そのうち MSM の数 (ゲイ・バイセクシュアル男性に感染経路不明の男性を加えたもの) は 34 名 (65.4%) であった。34 名のうち初診時エイズ発症者は 6 名 (17.6%) で、初診時 CD4 値の平均値、中央値はそれぞれ 362.0、306.5 であった。一方、2004 年、2005 年の新規 HIV 陽性者のうちの MSM の割合は、85 名中 63 名 (74.1%)、86 名中 68 名 (79.1%) で、着実に増加した。MSM の陽性者で初診時エイズを発症していた患者は、各々 17 名 (27.0%)、18 名 (26.5%) であり、ベースラインデータに比べ絶対数、割合共に増加していた。2004 年、2005 年の新規 HIV 陽性者の初診時 CD4 値の平均値はそれぞれ 267.8、282.5 であり、中央値は 269.0、

313.0であった。

各々の年における、MSMで50歳未満と50歳以上の初診時エイズ発症者の割合、初診時CD4値の平均値と中央値は資料2の通りである。いずれの年も50歳以上に初診時エイズ発症者の割合が有意に高く、且つCD4値も50歳以上が50歳未満に比べ低値であった。

## II) 今後の予防啓発活動の方針

名古屋医療センターの新規 HIV 陽性者の動向を効果判定の指標にする限りにおいては、これまでの我々の諸活動は HIV 感染予防に有効であったとは判定できない。そこで、我々はこれまでの活動に加えて新たな視点からの予防対策を導入しなければならないと考えた。新たな視点とは次の3点である。

- 1) ゲイコミュニティに対し、新たな手段による情報発信を実施する。
- 2) 我々の活動の理解者を増やして協働組織を拡大し、ゲイコミュニティに対する情報発信の質と量を高めると共に、検査機会の拡充を図る。
- 3) 社会全般に対する HIV 関連情報の発信に努める。社会全般の理解度の上昇はゲイコミュニティの理解度の上昇に貢献するのみならず、コミュニティに属さない高齢者 MSM に対する情報提供に繋がるからである。

## III) 今後の予防啓発活動

今年度を含む向こう3年間の具体的な予防啓発活動は、これまで実施してきた諸活動の継続と、上記方針に基づいて導入した新たな活動の2本柱とした。

継続活動は以下の通りである。

- 1) 情報発信
  - ① インターネットによる HIV 情報の発信
  - ② 勉強会の継続
  - ③ 啓発拠点 (3N) の充実
  - ④ 無料 HIV 抗体検査会に併設した啓発イベント (NLGR) の開催
- 2) メッセージ付コンドームのゲイバーとハッ

テン場への配布

- 3) 無料 HIV 抗体検査会の開催
- 4) 調査研究
  - ① 検査会受検者に対する検査会、現行の検査体制、検査頻度などに関する調査
  - ② NLGR のイベント参加者に対する HIV 関連意識調査

新たな予防活動は以下の通りである。

- 1) 情報発信
  - ① コミュニティペーパーの作成と配布
- 2) 協働組織の拡大
  - ① 医師会のメンバーとの協働
  - ② 保健所の医療者との協働
  - ③ 行政との協働
  - ④ 教育関係者との協働
  - ⑤ 他の NGO/CBO との協働
- 3) 社会全体への啓発
  - ① 世界エイズデー in NAGOYA の開催
  - ② サマーセミナーへの参加

以下に上記活動に関する今年度の成果を記述する。

[継続活動]

- 1) 情報発信
  - ① インターネットによる HIV 情報の発信：  
ALN のホームページによる情報提供に加え、本年2月からはネットラジオとブログ形式による情報提供を開始した。これら2つの方法による情報提供は、一般情報の中に HIV 関連情報を組み込むもので、2月の28日間にネットラジオには延べ2627人がアクセスし、ブログには延べ5489人(ユニーク数1785人)がアクセスした。
  - ② 勉強会の継続：  
勉強会は2000年6月から今日に至るまで継続されている。毎月第3日曜日の午後3時から5時まで開催された。毎回前半は基本的な知識に関するもの、後半はやや専門的な知識に関するものの2部構成で進められた。参加者は25～35名で、リピーターが多く新規参加者は毎



回4~5名であった。

### ③啓発拠点(3N)の充実:

平成16年8月から、Nagoya Nagoyaka Navigation(3N)と名づけられた啓発拠点を開設した。以後、毎週木金の午後8時から11時までと土日の午後2時から8時までの4日間オープンした。11坪の狭い空間ではあるが寛げるイスとテーブルを置き、その周囲に啓発資材とコンドームを配置して自由に入手可能とした。コンピュータも用意し、インターネットは常時使用可能とした。3Nへの来場者数は毎月おおよそ70~90名であった。本年1月の来場者は82名、2月の来場者は73名であった。

### ④無料 HIV 抗体検査会に併設した啓発イベント[NLGR]の開催:

2005年6月11日12日に名古屋市の中央に位置する池田公園とその周囲のゲイバーなどをイベント会場としてNLGRを開催した。今年は啓発のためのプログラムを重視し、啓発映画の上映、「大人のための性教育講座」と題したトークショー、HIV/AIDSについて語り合う「しゃべり場」、HIV 啓発ブースなどが、数多くの楽しい企画と共に用意された。

### 2) メッセージ付コンドームのゲイバーとハッテン場への配布:

30軒のゲイバーと4軒のハッテン場に毎月2回コンドームを配布した。配布数の合計は月約4000個で、4軒のハッテン場では我々が配布するコンドームに加えオーナー自身が毎月約1000個のコンドームを用意してくださっている。

### 3) 無料 HIV 抗体検査会の開催(資料3~11):

6月11日(土)12日(日)の二日間にわたり、NLGRの中心的イベント会場である池田公園の前の民間ホテルを借りて開催した。11日に検査前オリエンテーションと採血を行い、検体は名古屋医療センターに送って翌日の正午までに結果を出した。検査はHIV抗体に加え、HBsAg、TPHAも実施した。HIV抗体検査はPA

法とイムノクロマト法の2法をスクリーニング検査とし、少なくともどちらかに陽性もしくは擬陽性を示した検体に確認検査を行った。確認検査としては通常のエスタンプロット法に加え、高感度HIV-RNA定量法を併用した。オリエンテーション担当者は全員女性の総計34名で、東海地区の保健所職員、名古屋医療センターを中心とする医療機関の医療者、NGO/CBOのスタッフが任務についてくださった。相談希望者には予防相談員、看護師、医師が別個に対応した。検査会を応援してくださる100名を超えるボランティアスタッフには検査会前に研修会を行い、HIV感染症、セクシュアリティ、HIV 予防啓発活動などについてあらかじめ理解を深めてもらうようにした。また、オリエンテーション担当者には上記研修に加え、ロールプレイなどの研修が加えられた。12日には東海地方在住の医師が結果を通知し、検査陽性者には医療機関を紹介した。今回から名古屋市内の3名の泌尿器科開業医が梅毒陽性者のフォローに参加してくださった。

検査会の受付人数は427名で、受検者総数は425名であった。HIV陽性者は9名(2.1%)で、HBsAg、TPHA陽性者はそれぞれ9名(2.2%:検査希望者は414名)、58名(14.3%)であった。アンケート調査を両日に行ったが、回答率はそれぞれ99%、97%であった。アンケート調査結果については、別の報告書に金子が記述する。ただ、ここに特筆したいのは、NLGR2005無料HIV抗体検査会を生涯最初のHIV検査と位置づけた人々が118名存在した事実である。

### 4) 調査研究

#### ①検査会参加者を対象にしたアンケート調査:

この結果とそれに対する考察については、金子による別の報告を参照のこと。

#### ②イベント参加者を対象とした HIV 関連意識調査:

イベント会場に来た人々に、年齢、居住地 NLGRの認知方法、HIV抗体検査の受検意思、受

検歴、HIV 感染症に対する知識の正確度などを調査した。結果の主なものゝ資料 12~23 で示す。20 代、30 代が大部分を占め、居住地としては地元の名古屋市を含む愛知県が大半であったが、関東、近畿からの参加者も多かった。NLGR を知った経緯は口コミが最も多く、次いでインターネットを介するものが多かった。NLGR で HIV 抗体検査を受ける意思を持つ人はそうでない人に比べ少なかった。受検しない理由としては、日程を理由とするものが最も多かった。過去 1 年間に受検した人の数は受検しなかった人の数に比べ、大幅に少なかった。その傾向は東海 4 県の参加者により強かった。受験会場としては、医療機関、保健所、過去の NLGR の順であったが、東海 4 県の参加者では、NLGR、医療機関、保健所の順であった。HIV 関連知識については正解率が高かった。

#### [新規活動]

##### 1) 情報発信

###### ①コミュニティペーパーの作成と配布：

2005 年 11 月よりコミュニティペーパーを名古屋市内のゲイバーに配布すると共に、啓発拠点の 3N に置いた。月約 300 部の発行で、ペーパーの形式は大阪の Sal+ に倣ったものである。A4 両面版でゲイコミュニティの情報を中心に掲載し、さりげなく HIV 関連情報を組み入れたもので、この点でも編集方針は大阪のものを参考にした。

##### 2) 協働組織の拡大

①医師会、②保健所の医療者、③行政、④教育関係者、⑤他の NGO/CBO、との協働もしくは協力関係を目指した。愛知県内科医会の会長の理解を得て、医師会の情報誌に HIV 関連記事を掲載する内諾を得ることが出来た。3 名の泌尿器科開業医の協力を得、NLGR 検査会で診断された梅毒の診療の紹介先としての機能を受け持っていた。うち 1 名と次回から参加予定の別の開業医は HIV 迅速検査を名古屋医療センターとの連携の下に実施して下さる運び

となりつつある。保健所の職員が 17 名 NLGR2005 の抗体検査会のオリエンテーション担当者として協力して下さった。これまでオリエンテーションは HIV と人権・情報センターのメンバーに一任していたが、2005 年の検査会からは東海地区の保健所を中心に、実際に HIV 予防活動に携わっている人々にオリエンテーションを担当してもらうことに方針を変更した。NLGR2006 には 23 名の保健所職員が応援をして下さる予定である。名古屋市、愛知県、静岡県の行政官が NLGR に協力して下さった。教育関係者との連携はまだ具体化していないが、愛知県の養護教員の会の代表者とコンタクトを取った結果、次年度ではあるが、ある私立高校の生徒 600 人を対象として HIV 関連の講義を行うこと、養護教諭を対象とした研修会で HIV 関連の講義を行うことが決定した。NLGR2005 には、他の 3 つ NGO/CBO のメンバーが、検査会のスタッフとして、また啓発ブースの開設と言う形で協力して下さった。

##### 3) 社会全体への啓発

###### ①世界エイズデー in NAGOYA の開催：

2004 年から名古屋地区の 6 つの NGO/CBO が協力してエイズデーに集会とパレードを行い、街の人々に HIV 関連情報を伝える活動を開始した。2005 年は協力団体が 9 つに増加した。さらには、集会とパレードのみならず、イベントとして講演会を開催し、名市大の市川誠一教授と名古屋医療センターの浜口元洋医師による HIV 感染症の講演を実施した。

###### ②サマーセミナーへの参加：

名古屋では毎年夏に、愛知県の私立大学関係者によって 3 日間にわたるサマーセミナーが開催される。これは様々なテーマによるセミナーを市民の中から募集して実施するもので、セミナーの主催も参加も自由なものである。2005 年は HIV 関連 NGO/CBO で 9 つのセミナーを開催した。ALN は MSM を対象にした HIV 感染予防活動のテーマでセミナーを主催した。若い人々が

40名ほど参加した。

#### D. 考察

2000年に始まった名古屋地区のMSMを対象とした予防啓発活動は、1) 様々な方法によるゲイコミュニティへの情報発信、2) メッセージ付コンドームのゲイバーとハッテン場への配布、3) 無料HIV抗体検査会の開催、4) 調査研究、の4つの柱で実施してきた。既に、6年が経過し、我々のこれまでの活動に対する一定の評価が必要と考えた。評価の尺度はいくつかあると思われるが、今回は名古屋地区のHIV陽性者のほとんどが受診する名古屋医療センターにおけるMSMの新規HIV陽性者の年次推移を分析することで評価した。即ち、活動を開始した時点(1999年と2000年)の名古屋医療センターの新規HIV陽性者の動向と、2004年、2005年の新規HIV陽性者の動向とを比較検討した。具体的には新規陽性者総数、全新規陽性者の中のMSMの割合、MSMの新規陽性者の中のエイズ患者の割合、新規MSM陽性者の初診時CD4値を比較検討した。これらを効果判定の指標とした理由は以下の通りである。予防活動の最終的な評価は、新規HIV陽性者の増減によってなされるべきと考えた。ただし、方法の箇所述べたごとく、予防活動が効果を現し始める初期段階では、HIV抗体検査が普及するためHIV陽性者数が増えかつエイズ患者数が減少するというフェーズが存在すると予想される。そこで、新規陽性者の数に加え、新規エイズ患者数とその割合も検討した。また、HIV関連情報が普及し理解が深められれば早期診断が促されると期待されるので、予防活動が効果的であれば初診時CD4値が上昇すると思われる。そこで、初診時CD4値も有効性を判定する指標とした。

資料1に示されたごとく、1999年と2000年を合わせたベースラインデータに比べ、2004年と2005年のデータはこれまでの予防活動が

有効性を示すというものではなかった。2004年、2005年にはMSMの新規陽性者数、エイズ患者数、その割合ともに増加しており、逆にCD4値は上昇していなかったからである。また、MSMの新規HIV陽性者のうち50歳以上の高齢者ではどの年次でもエイズ患者の割合が高く、かつ初診時CD4値も極端に低い。この事実は、高齢者にはHIV関連情報が届いておらず、従って検査機会にも恵まれなかったことを示している。いずれも、我々の予防活動のあり方に反省を求める結果であった。

ただし、結果の項には示さなかったが、2003年以降のエイズ患者の割合は毎年減少しており(2003年の新規MSMエイズ患者の割合は28.8%、以後は27.0%、26.5%)、改善傾向が認められる。MSMの新規HIV陽性者のCD4平均値、中央値も2003年以降上昇に転じており(平均値は256.4、267.8、282.5、中央値は246.0、269.0、313.0)、この方法による評価では我々の予防活動が有効であった可能性を示唆している。

以上より、今後の予防対策としては、一部に有効性を示唆するデータもあることから、これまでの活動を中止せずに継続しつつ、新たな視点を導入し、それに基づいた新たな予防活動を加えることとした。新たな視点とは、1) ゲイコミュニティに対する新たな手段による情報発信、2) 我々の活動の理解者を増やして協働組織を拡大し、ゲイコミュニティに対する情報発信の質と量を高めると共に、検査機会を拡充すること、3) 社会全般に対するHIV関連情報の一層の発信、の3点である。我々の活動を図式化すると「協働組織→ゲイコミュニティ」となる。→の意味は、情報発信、働きかけ、検査機会の提供などである。1) はこの図式の矢印の部分の拡充であり、2) は協働組織の拡充であり、3) はゲイコミュニティの部分の拡充、即ちゲイコミュニティだけではなく社会全般ということになる。

1) は具体的には、コミュニテイペーパーの作成と配布である。既報のごとく、大阪の予防啓発活動の一つにコミュニテイペーパーの配布がある。これは一般のコミュニテイ情報のなかにさりげなく HIV 関連情報を組み入れるもので、コンドーム使用率という尺度で評価すると有効なものであった。この結果に基づいて、コミュニテイペーパーの作成と配布を我々の予防啓発活動にも導入した。2005 年の 11 月に最初のコミュニテイペーパーを発行し、以後毎月 1 回発行している。配布先はゲイバーで、3N にも置き、月 300 部を発行している。この活動の成果はまだ明確ではないが、印象として若者にはよく読まれているが高齢者の取得率は低いようである。配布先の拡大と取得率の上昇が現在の課題である。

2) は、具体的には医師会、保健所、行政、教育関係者、他の NGO/CBO のメンバーの有志との協働を探ることである。未だ医師会との協力関係は小さなものだが、これを少しずつ広げ、MSM の HIV 感染症に対する医師会サイドの理解を得て行きたいと考えている。医師会全体の理解と協力を得ることは現状では困難であるが、これが実現すれば HIV 感染予防が国民的レベルまで高まることが期待される。保健所の医療者との協働も実現しつつある。保健所の医療者が我々の予防啓発活動の一つに参加してくれることは、日常の HIV 抗体検査によい影響を及ぼしてくれるものと確信している。行政との協力も少しずつ前進した。名古屋市、愛知県、静岡県行政官との連携が、やはり NLGR の抗体検査会への協力と言う形で実現した。特に名古屋市は、次回の NLGR 検査会からは、市の職員による応援を業務として位置づけてくれたし、NLGR の検査前オリエンテーションの方法を名古屋市の保健所における HIV 抗体検査のプレカウンセリングの方法として活用いただけることになった。他の NGO/CBO のメンバーも抗体検査会にスタッフとして、また啓発ブースの開

設と言う形で協力してくれた。このように、ALN と名古屋医療センター以外の組織や団体の協力が得られたことは、MSM と HIV 感染症に対する広範な人々の理解が得られることにつながり、今後の予防啓発活動にプラスの影響を与えてくれるものと考ええる。MSM を対象にした HIV 感染症予防啓発活動の推進母体はあくまで ALN と名古屋医療センターの医療者であるが、その周囲に広範な人々の理解と協力を獲得することは、MSM の間に HIV 感染が拡大している現状を考えると、今後さらに一層重要になると思われる。

3) は、社会全般の HIV 感染症に対する理解度の上昇は、必ずゲイコミュニテイにおける HIV 感染症の理解度の上昇に繋がると考えたからである。また、50 歳以上の MSM はゲイバーやハッテン場を利用する頻度が少なく、従って商業施設を利用するグループをターゲットにしたこれまでの我々の予防啓発活動の枠外に存在することになる。即ち、これまでの活動だけでは 50 歳以上の MSM には十分な HIV 関連情報が伝わらないことになる。この層の MSM に HIV 関連情報を届け、注意を喚起し、検査の必要性を認識して早期診断を可能にするには、まずは社会全般に対する情報発信という形態を取らざるを得ない。従って、我々の活動は他の HIV 予防啓発活動との連携も必要となる。今年度の連携の試みとしては、世界エイズデー in Nagoya への参加とサマーセミナーへの参加がある。前者は 2004 年から名古屋地区の 6 団体の NGO/CBO が連携して始まった。2005 年には 9 つの団体が結集した。この中のいくつかの NGO/CBO は NLGR にも協力してくれた。他の団体との協働は重要である。他の団体の予防啓発方法は我々の参考になるし、我々の方法が他の団体の活動の参考にもなりうるからである。後者は愛知県の私立大学関係者によって毎年夏に 3 日間に亘って行われるセミナーで、多くの様々なテーマを募集して行われる。2005 年に

はいくつかの NGO/CBO と連携し、HIV/エイズに関する 9 つのセミナーを開催した。以上は他の NGO/CBO との協力の下に、ゲイコミュニティではなく一般社会に対して HIV 関連情報を伝えるものであるが、今後は ALN 独自に一般社会への HIV 関連情報発信をしていきたいと考えている。目的は一般社会の HIV 感染症の理解度を高めることと、50 歳以上の MSM への情報伝達である。次年度の大きな課題である。

以前からの予防啓発活動も今年度は継続した。

我々はインターネットによる情報発信を行ってきたが、2006 年 2 月からはネットラジオとブログ方式による新たな方法を導入した。いずれも一般情報に HIV 関連情報を組み入れるもので、結果に示したように、1 ヶ月間に 4 桁に上る多くの人々がアクセスしてくれた。この方法による情報伝達は始まったばかりであるが、多くの人々がアクセスしてくれるので、大変有力な手段と考えられる。有効に利用していきたい。

勉強会も継続している。ただ、勉強会参加者はリピーターが多く新規参加者が少ない。この点を改善する必要がある。一つの方法は、HIV 関連情報ばかりではなく、他の興味深いテーマを勉強会の中に組み込むことであろう。その他の方法としては、勉強会の会場を移動させることである。多くの施設を利用することによって、多くの MSM の人たちに勉強会の存在を知り且つ利用してもらえるのではないかと希望している。

3N の開設後 1 年半が経過したが、利用者の数が 1 ヶ月で 100 名を超えることは皆無で、利用者の伸びは頭打ちになっている。その原因として、現在の 3N の場所の問題がある。現在 3N は、ビルの地下 1 階の一番奥に位置しており、気軽に利用しにくい。また、広さも 11 坪と狭く、また窓も無く開放感に乏しい。もう少し条件のよい場所へ移動することを検討中である。

NLGR2005 は多くの参加者を得て成功裏のう

ちに幕を閉じることが出来た。数多くのイベントの中に、いくつかの HIV 関連の企画を組み入れて実施された。HIV 関連企画への参加者は決して多くはなかったが、「しゃべり場」などでは熱心な討論が行われており、充実したものであった。あまり啓発部門を多くすると参加者が少なくなる恐れもあるので、今回の程度が適当であろうと思われる。楽しく HIV 関連情報を学べる企画が望まれる。

イベント参加者に対して行われたアンケート調査では、検査会へ行かない人のほうが多く、その理由として日程が合わないというものが最も多かった。検査会を主催する立場からは、前日検査・翌日午後結果通知という日程を動かすことはほとんど不可能に近い。日程の合わない人々に対しては、保健所や休日検査の利用を促すべく、情報の提供と検査を受けやすい環境作りに我々が努めていかねばならない。幸い、多くの保健所職員が NLGR の検査会を支援してくれた。このつながりを活用して、保健所や休日検査の検査環境の改善が行われることが望まれる。アンケート調査から、特に東海地方の受験者の多くは NLGR の検査会には出向くが、日常的に検査を行っている保健所などの検査機関で HIV 検査を受ける機会が少ない傾向にあった。

このことも、検査関連情報の提供と検査環境の改善に我々が努めなければならないことを物語っている。

コンドーム配布も 2000 年から続けられている。月々の配布数は 4000 個とほぼ一定になった。

この活動を続けるべきかどうか ALN の内部でも議論になったが、継続すること自体に意味があること、コンドーム配布を上回る有効な方法を発見していないこと、などの理由から継続することになった。今後は年配者が集まる施設に積極的に配布を試みていきたい。

今年度も無料 HIV 抗体検査会を実施した。5

回目である。本検査会の究極の目的は、本検査会開催の必要性がなくなることである。そのためには、医療機関や保健所などの日常の検査環境の改善が望まれる。実際、受検者に対する調査で、現行の保健所の検査体制を利用しにくいと回答する人が2/3に及んだ。この問題を解決する一つの方法は、開業医の先生の協力であろう。多くの開業医のクリニックで検査が日常的に行われれば、限られた時間しか受検できないといった保健所での検査の問題点もクリアされるのではないかと思われる。2名の開業医がこの試みに試験的に協力して下さることになった。HIV抗体検査を開業医で行う問題点を明らかにしつつ改善を重ね、開業医によるHIV抗体検査の普及を試みてみたい。

本検査会には400名を超える受検者が来場した。本検査会に対するニーズの高さを示すものと思われる。ただし、大部分は20代、30代の人々であり、HIV情報と検査機会の必要な50歳以上のMSMの人々の数は極めて少なかった。彼らを受け入れるための工夫を今後していかなければならない。

9名がHIV陽性と診断された。早期診断に貢献したと考えられる。残念なことは、そのうちの1名は結果を聞きに来なかったし、結果を通知された1名は医療機関を紹介したにもかかわらず、紹介医療機関から受診した旨の連絡が我々の事務局まで来なかった。HIV陽性者を医療機関に繋げられなかったことは重要な問題で、その原因のひとつとして結果告知医師の告知スキルに問題が無かったかどうか反省しなければならない。次回からは告知医師に対する指導時間を増やす予定である。

118名の人々が、生涯初めてのHIV検査機会として本検査会を利用して下さった。この検査会は、待ち時間が長い時間帯があること、各担当者の対応を更によりものにすべきであること、陽性者の心理的サポートを更に十分なものに改善すること、など我々に課せられた課題

はいくつもある。決して完璧な検査態勢ではない。今後とも初めての人のみならずリピーターの人たちにも歓迎され、安心と信頼の置ける検査態勢に少しでも近づけるべく努力したい。

本検査会に対するニーズは高いこと、早期診断の機会になりえたこと、初めての受検者の受け皿としての機能を果たしたこと、などより本検査会は一定の意義を有するものと考えられる。今後も継続する予定である。

## E. 結語

2000年に始まった名古屋におけるMSMを対象にしたHIV感染予防啓発活動は、一定の成果を上げてきたものの、明確な有効性を示すまでには至っていない。従って、今後の予防啓発活動のあり方としては、これまでの活動を継続しつつ、新たな活動を組み入れなければならない。新たな活動方針とは次の3点に要約される。

- 1) ゲイコミュニティに対する新たな方法による情報発信（コミュニティペーパー発刊など）
- 2) 医師会、保健所の医療者、行政、教育関係者、他のNGO/CBOとの協働態勢の確立
- 3) 社会全般におけるHIV感染症の理解を目指した、社会全般に対するHIV関連情報の発信

上記方針に基づく予防啓発活動が、これまでの諸活動と共に今年度から実施され始めた。3年後の評価に向けて努力していきたい。

## F. 発表論文

(英文)

1. Nagai H, Wada K, Morishita T, Utsumi M, Nishiyama Y, Kaneda T. : New estimation method for highly sensitive quantitation of human immunodeficiency virus type 1 DNA and its application, J. Virol. Meth. 124, 157-165, 2005

(和文)

1. 内海 眞: 日本におけるHIV感染症/エイズの現況、日農医誌 54 (4)、723-733、2006

資料1：名古屋医療センターにおける  
新規HIV陽性者

	1999年+ 2000年	2004年	2005年
新規陽性者数	52人	85人	86人
MSMの割合	65.4%	74.1%	79.1%
AIDS患者の割合 (MSM)	17.6%	27.0%	26.5%
CD4値の平均値	362.0	267.8	282.5
CD4値の中央値	306.5	269.0	313.0

資料2：新規HIV陽性者(MSM)における  
若年者と高齢者の免疫能の比較

	99+ 00年 50>	99+ 00年 50<	04年 50>	04年 50<	05年 50>	05年 50<
HIV陽性者数	31	3	53	10	54	14
AIDS患者数と その割合(%)	4 12.9%	2 67.7%	10 18.9%	7 70.0%	9 16.7%	9 64.3%
CD4平均値	396.8	109.0	290.9	151.5	291.4	214.7
CD4中央値	376.0	114.0	269.0	54.0	323.0	47.0

### 資料3: 検査会の概要

- 日時:  
2005年6月11日(土): オリエンテーション、採血  
12日(日): 結果告知
- 場所: ホテルセントメイン名古屋
- 後援: 愛知県、名古屋市、エイズ予防財団
- 協力: 名古屋医療センター

### 資料4: NLGR2005無料抗体検査会 スタッフガイダンスプログラム

- HIV概要
  - NLGRについて(成り立ち・経緯・セクシャリティ)
  - 無料HIV抗体検査会概要
  - 受検者への対応
  - 陽性告知後のカウンセリング
  - 共感プログラム
- \* 2005年2月・3月に2回実施



資料5:NLGR2005無料抗体検査会  
オリエンテーション担当者  
研修会プログラム

- スタッフガイダンス
- 検査会手順
- 検査前オリエンテーション担当研修
  - ・資材説明(紙芝居)
  - ・ロールプレイ

\*2005年4月から5月にかけて5回実施

資料6:検査前オリエンテーション  
担当

- 名古屋市、及び名古屋市内保健所 9名
- 愛知県、及び愛知県内保健所 6名
- 三重県内保健所 2名
- 名古屋医療センター 9名
- 他医療機関及びCBO等 8名

## 資料7: 検査方法

### HIV

全例にPA法と免疫クロマト法によるスクリーニング検査を実施  
陽性及び偽陽性検体にウイスタンブ法と  
高感度法HIV-1定量検査を実施

### HBV

HBsAgを免疫クロマト法により測定

### 梅毒

TPIに対する抗体を免疫クロマト法により測定

## 資料8: 来場者内訳

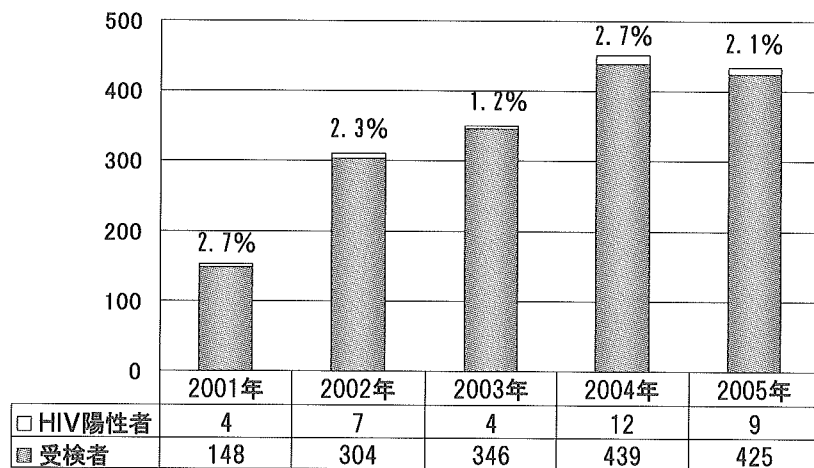
受付人数	427
受検人数	425
結果通知	408

受付者のうち翌日結果通知来場不可の2名のみ受検中止

### 資料9: 検査結果

- HIV (+) 9/425 ( 2.1%)
- HBV (+) 9/414 ( 2.2%)
- 梅毒 (+) 58/407(14.3%)

### 資料10: 受検者数・HIV陽性者数の推移



## 資料11: NLGR2005検査会 受検者の受検歴

- ・初めて抗体検査を受けた人  
118人(29.8%)
- ・既に検査を受けたことのある人  
276人(69.7%)
- ・無回答  
2人(0.5%)

## 資料12: 参加者年齢層

